

大阪市大『創造都市研究』第5巻第2号（通巻7号） 2009年12月

■ 査読論文 ■

41頁～57頁

創造活動者を視座とした創造の場の条件に関する考察 —横浜市・北仲BRICK & 北仲WHITEを事例として—

上野信子（大阪市立大学大学院・創造都市研究科・博士（後期）課程）

Study on Socio-Economic, Cultural and Spatial Conditions for the Creative Milieu from
the Standpoint of the Creative Worker :

A Case Study of Kitanaka BRICK & Kitanaka WHITE in Yokohama City

Nobuko UENO (Doctoral Course for Creative Cities, Graduate School for Creative
Cities, Osaka City University)

【目次】

- I. はじめに
 - 1. 本研究の背景と目的
 - 2. 事例の検討
 - 3. 調査概要
- II. 北仲BRICK&北仲WHITEが実現した要因と特長
 - 1. 北仲プロジェクトの概要
 - 2. 北仲プロジェクトの特長
- III. 北仲BRICK&北仲WHITEの評価①—アンケート調査より
 - 1. 調査概要
 - 2. 調査結果
- IV. 北仲BRICK&北仲WHITEの評価②—インタビュー調査より
 - 1. 調査概要
 - 2. 調査結果
- V. 結論

【要旨】

本研究は、ビジュアル、パフォーマンス、デザインなど様々な活動分野において、営利、非営利の目的で創造活動を行っているキャリアから若手までの“創造活動者”に着目し、創造活動者が財（作品や製品等）やサービス（アイデアやパフォーマンス等）の生産を行う“創造の場”に求める環境条件を明らかにすることを目的としている。

創造の場の事例として、多様な創造活動者のアトリエやスタジオが集積する北仲BRICK&北仲WHITEを抽出し、創造活動者へのアンケート調査とインタビュー調査を通して創造の場に求める条件を析出した結果、安価な賃料を優先的な条件としている他、特にデザインや建築分野の活動を行っている創造活動者を中心に、

歴史的建物が有する雰囲気や空間の特性が優先的な条件となっていることが明らかになった。その他に、多様な創造活動者の存在と交流が図られたこと、そして象徴的な建物でもあることによりオープンアトリエなどにおいて注目度の高い発表の機会が創出されたことが高く評価されていたことから、歴史的建物の活用は多様な創造活動者が集積する創造の場を生成するポテンシャルが高いことが明らかになった。

【キーワード】

創造活動者、創造の場、環境条件、北仲BRICK & 北仲WHITE、創造都市

【abstract】

The purpose of the present study is to investigate the socio-economic, cultural and spatial conditions of the “creative milieu” for creative activities, e.g. visual art, performing art and design. This investigation focuses on the people who work for both profit and non-profit base as well as with career or non-career.

As the research method, questionnaires and interviews were employed to the people working in Kitanaka BRICK & Kitanaka WHITE, where studios for creative activities had formed a cluster. Through this case study, the following conditions demanded for the “creative milieu” are found:

- 1) inexpensive rental fee
- 2) historical atmosphere and spatial character
- 3) existence of variety of creative activities
- 4) interactions among creative people and community people
- 5) opportunities for presenting the works with high attention

【Keywords】

Creative Worker , Creative Milieu, Socio-economic, Cultural and Spatial Conditions, Kitanaka BRICK & Kitanaka WHITE, Creative City

I. はじめに

1. 本研究の背景と目的

1980年代以降、グローバル化が進展する中でフォーディズムによる製造業が衰退し、都市中心部の雇用の喪失や人口の減少にいち早く直面したヨーロッパ諸都市では、文化芸術の創造性や知的で付加価値の高い産業の発展に着目した都市再生政策を採用するようになった。その後欧米を中心に、90年代後半から製造業を中心とした20世紀型経済から知識情報経済という21世紀型の経済社会への移行が明瞭となり、創造性あふれる企業や個人から構成され、文化的価値と経済的価値を有する財やサービスを生産する創造産業をコアとする創造経済へのシフトが見られるようになった。

日本においても、急速な国際化への対応やソフト化・サービス化の進展に伴う知識集約型産業構造への転換が課題となる中、多くの都市が創造型のサービス産業等、新たな産業の誘致や創出に取り組んできた。21世紀になると、金沢市や横浜市を嚆矢として創造都市政策を採用する都市が出現し¹⁾、様々な創造活動を行う主体が創造産業の中核的な役割をはじめ、社会的課題の創造的な解決や文化芸術の創造性を活用した地域再生の担い手として注目されるようになった。創造活動を行う主体に注目した既往研究では、例えばフロリダはワーキング・クラスやサービス・クラスに対して、現代経済の新しい担い手としてクリエイティブ・クラス²⁾に注目し、その内オリジナルの創造的なアイデアやパフォーマンス、作品を生む芸術家、エンタテイナー、俳優、デザイナー、建築家などを中核としている。またスロスビーは文化産業³⁾の内、創造性を中核とする産業として伝統的な芸術と新しい分野の芸術を位置づけ、これらの芸術分野が形成する産業の内、オ

オリジナルの部分を生産する主体に注目している⁴⁾。

一方で、1980年代以降の情報技術の発展やグローバル化、分権化により、従来、縦型であった技術、組織、制度などが横型のネットワークへと転換を見せるといった大きな変化を背景に、場の理論や関係性といった概念が注目されるようになった⁵⁾。特に、80年代よりヨーロッパを中心に着目されてきた芸術文化の創造性を主要な概念とし、90年代中ごろからランドリーや佐々木らによって提示されてきた創造都市の理論において創造の場は重要な構成要素とされている⁶⁾。佐々木が提示した「創造の場」の概念は、野中等が提示した組織における「場」の概念を都市や地域へと拡張して創造都市論の中に導入したものであり⁷⁾、野中が述べる「創造する力は単に個人の内にあるのではなく、個人と個人の関係、個人と環境の関係、すなわち『場』から生まれる」を引用し⁸⁾、創造の場での多様な主体の交流と創造性の関係に着目している。ランドリーは様々な都市再生の現場にかかわった経験から、創造の場では多様な主体との交流から財やサービスが創出されることを指摘し⁹⁾、生産の場としての機能に着目している。創造の場は物理的空間と仮想空間の両方が想定されるが、本研究においては、佐々木やランドリーが注目する多様な主体が対面交流を行う物理的空間の創造の場に着目した。

また、創造活動を行う主体に注目すると、従来より文化的価値を重視する文化芸術分野と経済的価値を重視するデザイン等の商業分野の創造活動を行う主体は異なる組織によって支援対象とされてきた。近年の創造産業政策や創造都市政策においても、支援や誘致の対象は特定の産業や職業を基準としている。しかし、創造活動を行う主体は時と場合に応じて複数の分野を融合して活動を行う等、活動状況は多様で柔軟な傾向が見られることから、営利・非営利という活動の目的や職業、産業で分類して支援することは現状に則していないと思われる¹⁰⁾。そこで本研究では、創造活動を行う主体の活動の多様性と柔軟性をふまえ、文化芸術分野と商業分野の活動を総合し、ビジュアル、パフォーマンス、デザイン、その他の様々な分野の創造活動を通して、文化的価値と経済的価値を有するオリジナルの創造的な財（作品・製品など）やサービス（パフォーマンスやアイデア等）を創出する主体を創造活動者と定義し、都市再生における創造産業の振興において創造性の核の部分を担当する創造活動者と創造活動者が活動を行う創造の場に着目した。

フロリダは創造経済を支えるためには、「創造性の社会構造」を構築することが重要であり、あらゆる種類の創造性の助けとなる広範な社会的・文化的・地理的環境の構築が求められることを指摘しているが¹¹⁾、環境条件について具体的に明らかにする研究は管見の限り十分になされていないと思われる。例えば、創造活動者が創造の場に求める条件に関する既往研究には上野・瀬田 [2008] があり、当該研究において創造活動者を対象に行ったアンケート調査の結果、創造活動による生計の状況、家族構成・居住形態、活動分野の属性にかかわらず共通して、安価な賃料と交通の利便性の条件が優先されていることなどが析出されているものの定量調査の結果の分析にとどまり、その詳細や検証は十分になされていないと思われる。そして、析出された安価な賃料と交通の利便性という一般に二律背反する条件を満たす創造の場として考えられるのは、例えば、シャッター通りとなってしまった駅前の商店街の空き店舗、少子化に伴い廃校になった学校、老朽化や効率化などによって遊休化した行政施設、廃業した工場や使われなくなった倉庫などの都心部の遊休不動産の活用が考えられるが、これらの多くが放置されていたり集合住宅やビルに建て替えられる事例は散見するものの、創造活動者の創造の場として活用する事例は多くはない。

また、上野 [2005] では、北船場地区（大阪市）の歴史的建物を活用した賃貸オフィスビルのテナントを対象にした入居理由に関する調査において、テナントは創造産業に分類される事業所・個人が多かったこと、そして入居理由として多くが建物の歴史的な雰囲気や意匠を挙げていたことを提示しているが、それらの結果を普遍化させるためのさらなる実証研究はなされていない。

そこで本研究では、上野・瀬田 [2008]、上野 [2005] の調査結果を援用し、後述するように様々な創造の場の事例を分析した結果、創造活動者が創造の場に求めていると考えられる条件の多くを満たす事例として、歴史的建物を多様な創造活動者のアトリエやスタジオとして活用した北仲BRICK&北仲WHITE（以下北仲プロジェクト）を抽出した。創造活動者と活動空間に関する既往研究には、居住地に求める条件に関する研究

として、梶・吉武・出口 [2003]、住田・渡邊・村田 [1998] があり、北仲プロジェクトに関する資料・文献・研究には、森ビル [2006]、永井 [2008]、野田 [2009]、小川 [2009] があるが、北仲プロジェクトの事例を通して創造の場の条件を析出するという視点での研究はなされていない。

以上の既往研究の検討と都市地域での遊休空間の活用をふまえ、本研究では多様な創造活動者が集積する北仲プロジェクトの事例研究を通して、創造活動者が求める創造の場の条件を明らかにすることを目的とする。そして本研究は、都市地域において創造の場の条件に適合する遊休空間を創造活動者の創造の場として活用することを誘導し、都市再生と創造産業の発展に貢献することが期待される。

本研究の構成は、はじめに創造の場の事例として北仲プロジェクトを抽出した根拠を明らかにし、次に創造の場の条件を明らかにするための調査概要を提示する。第2節では、既往研究によって析出された創造活動者が創造の場に求めている条件を参考に、関係者へのインタビュー調査を通して北仲プロジェクトの特長について整理する。そして第3節では、北仲プロジェクトに参加した創造活動者を対象にしたアンケート調査の結果より、同プロジェクトに対する評価の傾向を把握し、第4節では抽出した創造活動者へのインタビュー調査によって、同プロジェクトに対する評価の詳細を明らかにする。最後に第5節では、第2節で整理した北仲プロジェクトの特長と創造活動者による同プロジェクトの評価を対比させながら、創造活動者が創造の場に求める条件について提示する。

2. 事例の検討

創造活動者が財やサービスを生産するような創造の場として、例えばアトリエやスタジオ、オフィス等が考えられるが、それらが集積している集合アトリエ・スタジオの事例を、多様な創造活動者が集積していると考えられる政令指定都市の内、大阪市、横浜市、神戸市を対象に抽出し、既往研究によって創造活動者が創造の場に求める条件として析出された、安価な賃料、交通の利便性、24時間の使用、建物や周辺地域に雰囲気等の特徴がある、を主な指標として評価した結果、ダイビル・クリエイティブ・スクエア(大阪市)、北仲プロジェクト(横浜市)、本町ビルシゴカイ(横浜市)が全ての条件を満たしていた(表1)。これらの事例に共通するのは、再開発地域にある解体予定の民間の建物を創造活動者のスタジオやオフィスとして活用していることであり、管見の限り希少な事例と思われる(表2)。なぜなら一般に、再開発地域の解体予

表1 集合アトリエ・スタジオ・オフィスの事例

集合アトリエ・スタジオ	建物の所有		運営					建物の特徴			交通の便	地域の雰囲気	コワーキング	自治的になし	24時間使用可能	入居者						期間	賃料	発信性				
	行政	民間	行政	民間	NPO	財団	歴史的建物	倉庫	その他	駅近	駅近	駅近	自給的になし	自給的になし	自給的になし	ビジュアル	パフォーミング	デザイン	NPO	大学	キャリア	若手	更新あり	限定	安価	HP	公開	
大阪市	メビック扇町	○	-	-	-	○	-	-	○	○	-	○	-	○	-	-	○	○	-	-	○	-	○	○	○	○	○	○
	ダイビル・クリエイティブ・スクエア	-	○	-	○	-	○	-	-	○	○	-	○	-	○	-	-	○	-	-	○	-	○	○	-	-	-	-
	北船場レトロビル(仮称)	-	○	-	○	-	○	-	-	○	○	-	-	○	-	-	○	○	-	-	○	○	○	-	-	-	-	-
神戸市	C.A.Pプロジェクト	○	-	-	-	○	-	○	-	-	○	○	-	-	○	○	-	-	-	○	○	○	-	○	○	○	○	○
	波止場町TEN×TEN	○	-	-	-	○	-	○	-	-	○	○	-	-	○	○	-	-	-	○	○	○	-	-	○	○	○	○
横浜市	ZAIM	○	-	-	-	○	○	-	-	○	○	-	-	-	○	○	○	○	-	○	○	○	-	○	○	○	○	○
	北仲BRICK&北仲WHITE	-	○	-	○	-	○	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-	○	○	○	○
	本町ビルシゴカイ	-	○	-	○	-	○	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-	-	○	○	-	○	○	○	○	○
	創造空間 万国橋SOKO	-	○	-	○	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-	○	-	-	-	-	-	○

(出所) 扇町インキュベーションプラザ(メビック扇町) <http://www.mebic.com/>、ダイビル・クリエイティブ・スクエア http://www.chaos-chaos.com/our_project/daibiru.html、北船場レトロビル(仮称): 大阪市中央区の北船場地区に立地する新井ビル、青山ビル、伏見ビル、船場ビルディングを指す(上野 [2005])、C.A.Pプロジェクト <http://www.cap-kobe.com/>、波止場町 TEN × TEN <http://tnten.chu.jp/>、ZAIM <http://za-im.jp/php/>、本町ビルシゴカイ <http://www.45kai.info/index.html>、創造空間 万国橋 SOKO http://www.mol.co.jp/unabara/project_0606do.html (以上、2009年12月24日閲覧)をもとに筆者作成

表2 再開発地域における解体前の建物を創造活動者のアトリエ・スタジオ・オフィスとして活用した民間プロジェクトの事例

プロジェクト	所在地	建物の竣工年	入居者・団体			活用期間	区画数	オープンオフィス・アトリエ	自治的しくみ	入居者募集等のコーディネータ
			ビジュアル・パフォーマンス	デザイン	NPO・大学研究室等					
北仲BRICK&北仲WHITE	横浜市中区北仲通5-57-2	1926年 1928年	○	○	○	2005年6月～ 2006年10月	58 (オープン時)	○	○	○
本町ビルシゴカイ	横浜市中区本町5-49	1929年	○	○	○	2006年11月～	11 (オープン時)	○	○	○
ダイビル・クリエイティブ・スクエア	大阪市北区中之島3-6-32	1926年	—	○	—	2004年12月～ 2009年8月	20 (2006年4月時点)	—	—	○

(出所) 森ビル [2006]、シゴカイボン編集委員会 [2009]、ダイビル・クリエイティブ・スクエア http://www.chaos-chaos.com/our_project/daibiru.html (2009年12月24日閲覧) より筆者作成

定の建物は工事開始の数年前から入居者を制限し空室期間が長期に渡ることが少なくない現状の中で、あえて創造活動者の創造の場として活用されたこれらの事例に共通しているのは、歴史的な風情のある魅力的な建物と最寄り駅が近いという交通の利便性、周辺の賃料相場の半額から3分の1程度に設定された安価な賃料、入居者募集や建物の管理・運営の協力者であるコーディネータの存在である。特に北仲プロジェクトは、1) 入居者・団体の構成が、アーティストやデザイナー・建築家、NPO・研究室等、活動分野や営利・非営利の活動目的が多様である、2) 58区画の規模を有している、3) オープンアトリエの開催、4) 入居者の代表者で構成される運営ボードのしくみがある、という多くの要素を有していることから、多様な属性の入居者によって、これらの要素がどのように評価されているのかを確認することにより、創造の場に求める優先的な条件を析出することができると考えられる。

3. 調査概要

はじめに、既往研究で析出された創造活動者が創造の場に求める条件を参考に、北仲プロジェクトの特長について、同プロジェクトを運営した森ビル株式会社（以下森ビル）のプロジェクト責任者・管理者と建物の活用にあたって必要な諸手続き等で協力した横浜市と入居者の募集や調整等でコーディネータの役割を果たしたNPO法人BankART1929（以下BankART1929）副代表にインタビュー調査¹²⁾（Ⅱ）を行った結果と後述する入居者へのインタビュー調査（Ⅳ）によって得られた意見を参考に整理する。

次に、全部で55区画の各代表者を対象に森ビルが実施したアンケート調査の設問の中から、「北仲のここがよかった」という自由記述（n=51）の中で多く指摘されていた内容を抽出して整理し、北仲プロジェクトに対する評価の傾向を把握した（Ⅲ）。そして、北仲プロジェクトの評価傾向の詳細を把握するために、同プロジェクト終了後、連絡先が判明していた区画の代表者を対象に、メール等で同プロジェクトの評価に関するインタビュー調査への協力を依頼し、16名の区画の代表者（共同代表も含む）にインタビュー調査を行った¹³⁾（Ⅳ）。

Ⅱ. 北仲BRICK&北仲WHITEが実現した要因と特長

1. 北仲プロジェクトの概要

北仲プロジェクトが行われた北仲通北地区は、横浜市の都心臨海部の中心エリアとして再開発計画が進んでいる地区であり、横浜市の都市再生ビジョン「文化芸術創造都市・クリエイティブシティ・ヨコハマ」の中の5つの戦略的なプロジェクトの一つである「ナショナルアートパーク構想」の重点地区の一つに指定されている¹⁴⁾。同地区に隣接する馬車道エリアは、戦略的なプロジェクトの一つである界隈形成の重点取組地区の一つであり、アーティストやクリエイターが創作・発表・滞在（居住）するような創造界隈の形成が進められ先導的なプロジェクトとして、元銀行であった歴史的建物を文化・芸術の活動拠点として活用する

BankART1929プロジェクトや東京藝術大学大学院映像研究科が立地していた(図1)。北仲プロジェクトは、森ビルが取得した約2haの敷地内の、かつて国内中の生糸貿易の荷物を一括管理する事務所・倉庫であった歴史的な建物群の内の2棟を、1年半の期間、アーティストやクリエイター等のアトリエやスタジオとして活用するプロジェクトであった¹⁵⁾。

森ビルでは、土地の取得と前後して開発着工までの約1年半、建設用仮囲いで敷地を覆い、都市の中に空白を作ることは是非に関する議論がなされた後、クリエイティブ・シティ構想の中心に位置する建物を活用して何かできないかという相談を横浜市にしたところ、横浜市では短期間で実現する必要のあるプロジェクトであったことから民間で進める方が適していると判断し、BankART1929プロジェクトにおいて知見を蓄積し、様々な創造活動者とのネットワークを有するBankART1929の副代表を紹介した¹⁶⁾。そして横浜市は、BankART1929プロジェクトによって蓄積されていた知見から、同プロジェクトが横浜市の都市再生ビジョンの実現に寄与すると判断し、同プロジェクトの実現にあたって、関係機関の認可や様々な調整等の手続きの迅速化に協力した結果¹⁷⁾、約3ヶ月という短期間で北仲プロジェクトをスタートさせることができた。解体予定の建物の暫定活用は企業として管理・運営上の不安が残る中、横浜市やBankART1929の副代表の協力が得られたことは実現の推進力となった¹⁸⁾。

同プロジェクトが決定した後、4月に入居希望者を対象にした建物の見学会を2回開催し、5月初旬には55組の入居が内定して、5月半ばから内定者向けの説明会と契約締結が行われ、各部屋は入居者各自の負担による内装工事が行われ、森ビルは使用に耐えうるように建物の最小限のインフラ整備を行った¹⁸⁾。横浜市は経済面の支援は行わなかったが、建築基準法や消防法の検査、手続きの面で迅速な対応などの協力を行い、BankART1929の副代表は、アーティストやクリエイター等の豊富なネットワークを活用して入居への働きかけや調整を行う等、民間企業と行政とNPOの協働で準備が進められた。

多様なジャンルが集合したらおもしろいことになるのではないかと森ビルのプロジェクト責任者の考えに基づき、BankART1929の副代表は入居者・団体のジャンルが偏らないように配慮しながらも、終了時期がすでに決定している短期間のプロジェクトであったことから、できるだけ早く満室にしてプロジェクトをスタートしないと入居者は集まらなないと考え、BankART1929プロジェクトや横浜トリエンナーレの関係者を中心に声をかけたところ、情報が波及しすぐに入居者が決定した¹⁹⁾。その結果、全58区画の内、入居者・団体の業種構成はアーティスト・芸術団体が4割を占め、その他、建築家・デザイナー等やNPO、大学の研究室等、活動分野、営利・非営利という活動目的、既に高い評価を得ているキャリア組から若手まで多様な入居者・団体の構成が実現した²⁰⁾。入居者は建築家やデザイナー等の主に営利分野の活動を行う創造活動者の入居が比較的少なく、主に非営利分野の活動を行う創造活動者や団体が約7割を占めていた。また、無作為に10人の区画代表者へ入居前の横浜とのかかわりについて質問したところ²¹⁾、1) BankART1929で作品を発表したことがある(5人)、2) 横浜に出身の学校や勤務先があった(3人)、3) 特になし(2人)ということから、北仲プロジェクトの実現にはBankART1929プロジェクトが寄与していたことがうかがえる。

入居説明会では、事務所としての用途に規定された建物であったことから常時不特定多数に開放するような使用をしないこと、建物は耐震補強がなされていないこと、期日には速やかに退去すること、プロジェクト期間中に1~2回程度、街との交流機会を設ける際には積極的に参加すること、が確認され遵守することが強調された¹⁸⁾。森ビルの担当者によると、「当初はみんながいいプロジェクトにしたいと思うような機運はあまりなかったように思うが、北仲OPEN!(後述)で熱がある人がいたことなどで最後はいい形になったかもしれない。何よりも建物がよかったのでプロジェクトをみんなに愛させたのだろう¹⁸⁾」ということから、プロジェクトのスタート時点では、その後の活発な交流は期待されていなかったことがうかがえる。

北仲プロジェクトによって森ビルは、横浜市へ初めて進出するにあたり横浜市のクリエイティブ・シティの推進に協力することに加え、敷地を工事開始まで囲いで閉ざす予定であった同地区のにぎわいが創造され、再開地区の知名度とイメージの向上によって地域価値が高められることを期待した¹⁸⁾。そして横浜市は大規模なプロジェクトによって、多くのアーティスト等が東京から誘致されるとともに、クリエイティブ・シ

ティが推進されることを期待していた¹⁷⁾。またBankART1929は、近隣に新たに大規模な創造活動拠点ができることにより創造活動者のネットワークが形成され、BankART1929事業が推進されることへの期待があった¹⁹⁾、というように、同プロジェクトによって期待する効果がそれぞれ予見できたことから3つのセクターの協働が促進されたと考えられる。



写真1 手前から北仲 BRICKと北仲 WHITE (出所) 筆者撮影

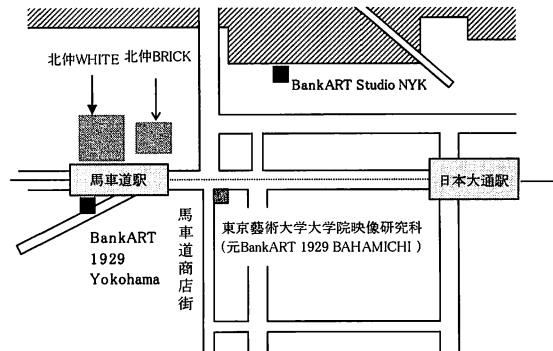


図1 北仲 BRICK & 北仲 WHITE と周辺地域 (2005年6月時点) (出所) 筆者作成

2. 北仲プロジェクトの特長

(1) 安価な賃料と交通の利便性

森ビルは、同プロジェクトの実施によって、付加価値は見込まないものの暫定利用期間の土地建物に対する公租公課相当額と管理運営費を賃料で賄おうとした結果、暫定活用の期間、建物が使用に耐えるように最小限のインフラ整備を行った費用を入居者・団体の使用面積に比した負担としたところ、入居者の初期分担費用は各入居者・団体の約1か月分の賃料となり、土地建物に対する公租公課相当額と共益費を使用面積の割合に応じて算出した結果、賃料は地域相場の3分の1程度と安価な設定になった²⁰⁾。その結果、賃料が2万円に満たない区画もあったことから経済的にゆとりのない若手の創造活動者でも入居のハードルが低く、すでにキャリアを形成している創造活動者・団体にとっては広い区画を安価に借りることができた¹⁸⁾。初期費用や賃料が安価に設定できたのは、58区画という規模の大きさによって、24時間常駐の警備費や日勤管理者の報酬、清掃費などを含む共益費やインフラ整備の初期費用や公租公課の負担金が抑えられたことによるものと考えられる。

建物は、横浜高速鉄道・みなとみらい線・馬車道駅すぐのところに立地し、渋谷まで約30分で移動できることから、特にクライアントとの打ち合わせが東京都心部に多いデザイナーや建築家等にとって交通の利便性が高く、幹線道路に面した敷地には駐車スペースもあったことから作品や材料等の搬入・搬出が容易であった¹⁸⁾。

(2) 建物の特徴と周辺環境

活用された2つの建物は、かつて国内の生糸の貿易荷物を一括管理する事務所であったという国際貿易港・横浜の歴史を体現する魅力的な建物であり、約80年の歳月を経ていたが直近まで活用されていたことから²¹⁾、最小限の補修で活用することが可能であった。そして、建物の構造は中庭をはさんだ周り廊下形式で天井の高い大小の部屋が50余りあり、オフィスやスタジオとして活用するのに適していたのと、両建物の内、北仲 WHITEは解体が決定していたことからプロジェクト終了後、現状回復の必要がなく空間を自由に使用することができた¹⁸⁾。また両建物の周辺地域は、元銀行であった歴史的建物を創造活動の拠点として活用していたBankART1929 YOKOHAMAや東京藝術大学大学院映像研究科などが立地して創造界隈の形成が進んでいた。そして、建物が都心臨海部に立地していたことから建物の周辺は横浜固有の雰囲気があった。

入居希望者による事前の見学会において、入居者の建物の第一印象の中には「水周りのいやな臭いがした

(デザイナー)²¹⁾「廃墟のように感じた(デザイナー)²¹⁾」という意見があったが、多くの人が価値を認めにくいような状態の中でも、「セルフビルドでなんとかなると思った(インテリアデザイナー)²¹⁾」「ボロボロの状態を見るとわくわくした(現代美術家)²¹⁾」など、創造活動者は空間の潜在的な魅力を発見していたことがわかる。同プロジェクトでリーダー的役割を果たした建築設計事務所・みかんぐみの曾我部氏は、都内にあった事務所から北仲への移転を考えた時のことを振り返って、「古い建物をリノベーションしてできた場所に魅かれるのです。どこにでもある普通のビルの2階とかでも安ければよかったのかというと、そうでもないように思います。みかんぐみが北仲WHITEに移ることを検討したときにも、家賃が安いということだけだったら、移転は実現していないでしょうね²¹⁾」という意見の中に、実験的な創造活動を行っている創造活動者が優先的に求める創造の場の条件として、安価な賃料に加え建物の魅力という創造の場の条件が示唆されていると思われる。

森ビルが入居者をアーティスト、デザイナー、建築家、大学の研究室等と指定し、使用目的を事務所及びアトリエに限定した結果¹⁸⁾、創造活動者で構成される創造の場となったが、入居前の老朽化した建物の状況や1年半という短期間の活用条件では、創造活動者以外の層では同プロジェクトに対してあまり魅力を感じることがなく、入居希望者は多くはなかったのではないかと推測されることから、建物の歴史性や雰囲気は創造活動者が創造の場に求める固有の環境条件と考えられる。

(3) 24時間の使用

敷地内には24時間警備員が常駐していたこともあり、「定時に見回りをしてくれるので、夜中に荷物の出し入れをする時も相談できて安心感があった(デザイナー)²¹⁾」との意見が聞かれた。また、近所のコンビニのオーナーは、「北仲の人達が大勢訪れるのは圧倒的に深夜。しかも面白いことに、同じ顔が早朝にもいらっしやるんです²⁵⁾」との指摘から、創造活動者は創造の場の条件として、24時間使用できることを求めるニーズは高いことがうかがえる。

(4) 現状回復の義務なく自由に改装

北仲WHITEはプロジェクト終了後取り壊すことが決定し、現状回復の義務がなく自由に改装することができたことから、「期間限定ということもあり、壁を赤く塗ってみた(建築)²⁶⁾」「建物中央にある階段の壁面にもペイントをさせてもらう機会がありました。壁の塗装が古くなってあちこち剥がれているのですが、剥がれた部分から向こう側の空がのぞいているような感じになるように、様々な時間帯の空の色をイメージした色彩を剥離部分に塗り込んでいきました²⁷⁾(美術)」など、建物の空間を活用して通常では実現が困難と思われるような表現が生まれていた。

(5) 多様な創造活動者

多様なジャンルが集合したらおもしろいことになるのではないかという森ビルのプロジェクト責任者の考えにより、入居者・団体のジャンルが偏らないように配慮した結果¹⁹⁾、全58区画、約240名の規模の内、入居者・団体の業種構成はアーティスト・芸術団体が4割を占め、その他、建築家、デザイナー、NPO、大学の研究室等、活動分野、営利・非営利という活動目的、既に高い評価を得ているキャリア組から若手まで多様な入居者・団体が構成されることになった(図2)。また、入居者募集の時期が横浜トリエンナーレの準備期間と重なっていたことから、キュレーターやアーティスト等、トリエンナーレ関係者が入居していた¹⁹⁾。多様な入居者構成が実現した理由の一つには建物の構造に特徴があり、1・2階は小さい独立した部屋が多かったことから主にアーティストが入居し、3・4階は200㎡クラスの大区画であったため、大学のサテライト研究室や建築設計事務所などの入居に適していた¹⁹⁾。これらの多様な部屋の広さは賃料の多様性も実現していることから、経済的にゆとりのない創造活動者から主に営利活動を行っている創造活動者など多様な創造活動者の入居が実現したと考えられる。

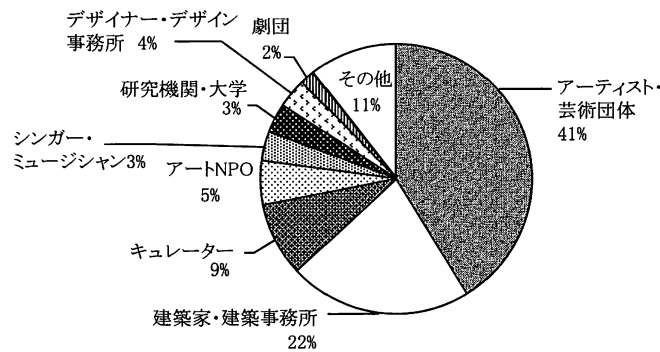


図2 入居者・団体の業種構成
(出所) 森ビル [2006] p.18 より筆者作成

(6) 自治的しくみ—運営ボード

森ビルから運営ボードのしくみが提案され、入居者の中から部屋の使用率が高く比較的多くのスタッフを抱える事務所や団体の代表を中心に選出された各フロアの代表者と、森ビルからプロジェクトの責任者である担当部長と日勤管理者、そして同プロジェクトのコーディネータの役割を果たしたBankART1929副代表を加えたメンバーで運営ボードを構成し、月に1回程度、各フロアの入居者の意見を集約して運営会議が開催された²⁸⁾(図3)。ボードメンバーは対等な立場で会議に参加し、初めはお互いに価値観の相違等で距離を感じたものの、1年半の間、定期的にコミュニケーションを図ることによって理解が深まっていった¹⁸⁾。森ビルは「入居者に威圧感などを与えないようにできるだけ直接前面に出ないようにし、日勤管理者を通して入居者と対応するように心がけた¹⁸⁾」というように、入居者の創造活動を阻害しないように柔らかな対応を心がけていた。そして日勤管理者は、自身がアーティストでもあることから入居者の活動への理解が深く、入居者と森ビル間の通訳的役割を担って、「入居者間のファシリテーターとして、重要な役割を果たした²⁹⁾」。創造活動者の創造性を阻害しないような柔らかな支援とともに、創造活動者にとって日勤管理者とフロアの代表者という2つの相談・提案窓口があったことから、自発的な活動の提案や相談などが比較的容易にできるなど、住民代表による自治的しくみが構築されていたと考えられる。

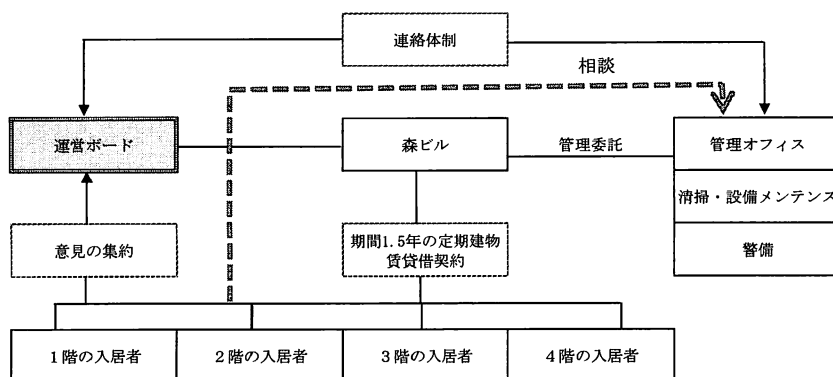


図3 自治的しくみ
(出所) 森ビル [2006] p.6 を参考に筆者作成

(7) 交流の促進と発表の機会の創出—オープンアトリエ「北仲OPEN」の開催

オープンアトリエのイベント「北仲OPEN」(表3)は北仲プロジェクト開始から約5カ月後、はじめは横浜トリエンナーレの協賛企画として若手アーティストたちから提案されたという経緯があり、発案者たちは、はじめは入居者のほとんどが参加するような大規模なイベントになるとは想定せずに自身の作品の発表の機

会として提案していたが、だれかが言いだしてくれるのを待ちかねていたという意見とともに参加希望者が増え、その後実行委員となって煩雑な事務手続きなどに追われて大きな負担を感じながらも、最後までやり遂げた経験がその後の創造活動の発展につながった³⁰⁾。オープンアトリエのイベントを創造活動者たちが共同で開催したことにより、プロジェクトの開始当初はそれぞれがドアを閉じて自己の活動に集中し交流は少なかったところ交流が盛んになる契機となった³¹⁾。イベント終了後は入居者の間に連帯感のようなものが生まれ³⁰⁾、今度は全入居者が参加する2回目の「北仲OPEN!!2006」が開催されて、多くの来訪者との交流とともに注目度の高い発表の機会が創出された。

このようにキャリアや活動目的、活動分野も様々な50組余りが参加し、建物全体で取り組むような大規模なイベントを開催することができたのは、一つには、煩雑な手続きなどを引き受けて入居者全体をリードした若手アーティストやNPOなどの主に非営利活動を行っている創造活動者が存在していたこと、もう一つは、運営ボードのしくみが構築されていたことにより建物内の多様な創造活動者の参加を促したと考えられる。複数の入居者から、この2回のイベントがなかったら短期間で入居者同士の横のつながりは期待できなかつただろうとの指摘があった³²⁾。入居者内外の交流の触媒となった北仲OPENは、象徴的な建物で開催されたことや横浜市のイベントと連動して開催したことにより注目度の高い発表の機会を創出したとともに、入居者が共同で準備等に取り組む過程を通して相互の理解が深まり交流を促進したと考えられる。

表3. 北仲OPEN開催実績データ

	北仲OPEN!2005	北仲OPEN!!2006
参加団体数	40団体(任意参加)	55団体(入居者全員)
開催期間	2005年11月18日～12月18日(1ヶ月間)	2006年7月28日～8月6日(10日間)
入場者数	約3000人	約1500人
イベント数	32(オープニング・クロージング含む)	27(オープニング・クロージング含む)
エキシビジョン	20	8
事務局員数	9人	10人

(出所) 森ビル [2006] p. 11

Ⅲ. 北仲BRICK&北仲WHITEの評価①—アンケート調査より

1. 調査概要

前節のように様々な特長を有した北仲プロジェクトであったが、創造活動者は同プロジェクトをどのように評価していたのであろうか。森ビルが全55区画を対象に実施したアンケート調査の設問の中から、「北仲のここがよかった」という自由記述(n=51)の中で多く指摘されていた内容を抽出して整理し、北仲プロジェクトに対する評価の傾向を把握した(表4)。自由記述には、プロジェクトでよかったことの全てが網羅されているとは考えにくい、その内、評価の高い事項が優先的に述べられていると考えられるため、これらの記述を分析することにより概ね評価の傾向が読み取れると考える。分類方法は、例えば「多分野のクリエイターと交流がもてて色々刺激になった」という回答については、「入居者の多様性」と「交流」という評価項目に1つずつカウントした。また、記述内容の分類が困難・不明の場合は分類の対象から外した。

2. 調査結果

創造活動者は同プロジェクトに対して「入居者の多様性」、「建物」、「交流」、「個人の活動」についての評価が高かった。一方、既往研究で創造活動者が創造の場に求める条件の優先度が高かった「安価な賃料」や「交通の利便性」のような条件については多くの記述が見られなかった。

次に、主に営利の創造活動を行っていると考えられるデザイナー・建築家等と、主に非営利の創造活動を行っていると考えられるアーティスト等に分類してそれぞれのプロジェクトの評価の特徴について考察した

結果、アーティスト等は「個人の活動環境」に関する評価が高く、デザイナー・建築家等は「入居者の多様性」「交流」「建物」についての評価が高かった。

表4 「北仲のここがよかった」(複数回答) アンケート結果

(単位：%)

アンケートの自由記述から抽出した評価されていた主な内容	入居者 (n=51)	アーティスト等 (n=24)	デザイナー・建築家等 (n=12)
入居者の多様性	(1)27.5	(3)16.7	(1)50.0
交流	(3)17.6	8.3	(2)41.7
連携・協働	5.9	4.2	8.3
建物	(2)21.6	(2)20.8	(3)33.3
周辺地域	9.8	8.3	16.7
地域(建物外)への開放	7.8	4.2	16.7
個人の活動	(3)17.6	(1)25.0	8.3
交通の利便性	9.8	12.5	0.0
賃料	5.9	12.5	0.0
横浜トリエンナーレと同一時期	3.9	4.2	8.3
自由に改装	3.9	4.2	8.3
24時間使用可能	3.9	8.3	0.0
共有スペース	2.0	4.2	0.0

(注) 森ビルアンケート結果より筆者分析。(1)、(2)、(3)は、選択された項目の多い順を指す。

Ⅳ. 北仲BRICK&北仲WHITEの評価②—インタビュー調査より

1. 調査概要

森ビルが全区画の代表者を対象に実施したアンケート調査で得たプロジェクトの評価傾向の詳細を把握するために、同プロジェクト終了後、連絡先が判明していた区画の代表者を対象にメール等で同プロジェクトの評価に関するインタビュー調査への協力を依頼し、16名の区画の代表者(共同代表も含む)にインタビュー調査を行った¹³⁾(表5)。同プロジェクトは、安価な賃料、交通の利便性、建物の歴史性や周囲の環境など様々な条件を満たしていたことから、各々の項目について質問すれば全般にわたって評価が高いことが推察されたため、自由に回答してもらった結果を表4の「評価されていた内容」の項目に着目しつつ整理した。

全入居者の構成ではアーティスト・芸術団体の割合が41%と一番高かったが、インタビューの対象者は建築家が一番多く、続いてデザイナーや様々なジャンルのアーティスト、NPO、アートマネージャーとなっていた。入居者全体と比較して、活動分野の構成割合に違いがあったものの、全入居者の構成の特徴である多様性は確保されていた。

また、入居前の活動拠点について全体では、「入居者全体の7割が東京からの入居者であった¹⁸⁾」が、インタビュー対象者では、東京都が横浜市内や神奈川県内よりも少し多い程度であった。

2. 調査結果

インタビュー調査では「北仲のここがよかった」ことに関して自由に回答してもらった結果、少数の項目

に対して詳細に言及している人と、多くの項目にわたって言及している人がいたが、アンケート調査で整理した項目(表4)に着目して内容を整理すると表5のようになった。以下に調査で得た発言の詳細を加えながら整理する。

(1) 賃料

キャリアの有無や活動目的・分野にかかわらず、安価な賃料が入居動機の一つになっていた。「今まで自宅で活動していたが、安価な賃料のため、独立した活動拠点をもつことができた」(以下表5のNo.による。No.1, 5, 7, 8, 15)、「従前より広いスペースを借りることができた」(No.10, 11, 12)というように、自宅以外に独立した創造活動の場を確保できた層と、活動の環境がより充実した層の両方にとって安価な賃料に対する評価が高かった。

そして、「自宅での活動から他に活動拠点を移そうと考えていた時にプロジェクトに出会った。もし賃料が相場であったら他も探して比較しただろうが、安価だったため他と比較することなく入居を決めた(No.7)」というように、相場の3分の1という賃料は、強い入居動機になることがうかがえた。

(2) 建物

全体的に建物に関する評価が高いが、特に建築やデザイン分野のように主に営利活動を行う創造活動者は、建物の魅力が大きな入居動機になっていた(No.1, 5, 6, 7, 9, 11, 12, 13, 15)。「従前のオフィスの契約更新が済んだばかりであったが、あえて解約して入居した(No.9, 11)」また、「偶然、仕事の打ち合わせ先で建物の見学会のことを知り、クリエイターの友人と気軽に参加したところ、建物の入り口の雰囲気、間取り、ドアノブなどの建物の造りの楽しさが気に入って入居することにした(No.5, 6)」「海外で勤務していた建築設計事務所が風情のある歴史的な建物の中にあり、帰国後も同様の建物を探していたところ流通していなかったため諦めていたが、偶然、同業の知人から見学会のことを聞いて参加しすぐに入居を決めた(No.9)」など、建物の魅力がキャリア層や主に営利活動を行っている創造活動者の強い入居動機になっていた。

また、スタッフを抱えるような建築設計事務所などにとっては、1年半という短期間のプロジェクトは移転費用や労力を考えると大きなマイナス要因であったにもかかわらず、あえて入居したのは建物の魅力という条件の優先度が高いためであることが明らかになった。その他に、「建物に惹かれて、関係者がうちのスタジオによく集まるようになり、雑談の中から様々な企画が生まれた(No.7)」など、建物の魅力が建物外の人たちも惹きつけて来訪を促し、交流の中から様々なアイデアが創出されるといった好循環が生まれていた。

(3) 入居者の多様性と交流

自分とは異なる分野やキャリアの入居者との交流を評価する意見が多かった(No.1, 2, 3, 7, 9, 12, 13, 15)。「建築家同士は仕事でライバルになることもありどうしても一定の距離があるが、アーティストの場合は比較的自由に部屋を訪問して制作の様子や作品を見せてもらうことができた。若い発想がヒントになるなど大いに影響を受けた(No.12)」という意見から、日常的な交流の中で、発想や表現の違いなどに刺激を受けていたことがうかがえる。

また、「建物内の路地感覚がよかった(No.14)」という意見は、プロジェクト中に2回開催されたオープンアトリエのイベントをきっかけに、お互いの部屋を行き来するようになったり、廊下・トイレなどの共有スペースでの立ち話が増えるなど交流が促進され、建物内がコミュニティのようになった状況が評価されていた。それまでは個々が自室にこもって活動していたのが、オープンアトリエの取り組みが触媒となって交流が促進されたことを複数の人が評価していた。

(4) 周辺地域や来訪者との交流

入居者間の交流だけでなく、建物の周辺地域の人たちや外来者との交流を評価する意見が多かった (No.3, 4, 7, 8, 9, 11)。「プロジェクトは、町に対していい活気を与えた。発信性があった (No.11)」という意見では、「北仲OPEN」をはじめとする建物外に開放した様々な活動が、入居者のみならず周辺地域をはじめ様々な方面へ波及効果を及ぼしたことが実感されていた。

また「北仲OPENは、アート関係者以外にも、美術を身近に感じてもらうきっかけをつくり来訪者との交流が生まれた (No.3)」という意見は、日頃から、アート関係者以外との交流に関心が高かったものの実践の機会がほとんどなく、同プロジェクトによって機会が創出されたことに対する評価がなされていた。

(5) 個人の創造活動の充実

「北仲OPEN」のような建物全体で取り組む大規模なイベントを事務局スタッフとして運営した希少な経験によってネットワークが広がったり、自身の活動に影響を与えたことに対する評価がなされた (No.1, 2, 14)。また、今まで空間の確保が困難で表現できなかったような実験的なアイデアを実現できたことに対する評価 (No.7, 11, 15) や、適度なプライバシーの確保と他の入居者との交流のバランスがよく、自身の創造活動にとって最適な環境が確保できたことに対する評価 (No.3) がなされた。

(6) 連携・協働

プロジェクト中に異なる分野間で協働が生まれていた (No.2, 3, 7, 12, 16)。「建築家の依頼を受けてビルのリノベーションの案件で壁画を担当した。建築家の活動を見ていて、美術でもお金をつくらなきゃという焦りのようなものを感じた (No.2)」のように、主に文化的価値の創出を意識していた美術家が建築家との協働を経験し、経済的価値の創出に刺激を受けた経験が評価されていた。多様な分野や目的の創造活動者が集積し、日常的な交流を通して信頼が構築されて協働が生まれ、文化的価値と経済的価値を有する財やサービスが創出されるというプロセスが考えられる。

ただし、多くの創造活動者が「交流」を評価しているのに対して、「連携・協働」の評価が比較的少なかったのは、プロジェクトの期間が1年半と短く入居者数が多かったことから、建物全体で取り組んだ「北仲

表5 「北仲のここがよかった」入居者へのインタビュー調査結果 (自由回答)

No.	1	2	3	4	
年代	20	20	30	50	
入居前の活動拠点	神奈川県内	東京都内	神奈川県内	横浜市内	
ジャンル	立体作家	平面作家	平面作家	平面作家	
プロジェクトの評価	入居者の多様性・交流	様々な人に出会えた。	入居している建築家と話すようになり、建築物に目がいくようになった。	年齢もジャンルも多様なクリエイターが集まっていることが刺激になった。交流の幅が広がった。	
	地域や来訪者との交流	—	—	北仲OPENは、アート関係者以外にも美術を身近に感じてもらうきっかけをつくることができ、来訪者との交流が生まれた。地方からの来訪者が多かった。	
	連携・協働	—	建築家と一緒に仕事をするなど、経済的な仕事が増えた。	展示会の準備等をお互いに助け合える仲間ができた。	
	建物	建物の中の造りがいい。天井が高い。古いものに対するあこがれがあり、ボロボロだとうれしくなる。	—	—	
	個々の活動	イベントの事務局を担当して大変勉強になった。	各地での滞在制作へ誘われるようになった。様々なイベントを企画、運営することができた。	プライバシーが守られ、ちょうどいい距離感が心地よかった。	自分の世界はどこにいても変わらないが、人の流れなど場の力を感じた。
	賃料	賃料が安いので独立したアトリエがもてた。	—	安価だった。	—

(注) 自由回答であったことから、回答のなかった内容については、空欄とした。

No.	5	6	7	8	
年代	20	20	30	30	
入居前の活動拠点	神奈川県内	神奈川県内	神奈川県内	横浜市内	
ジャンル	デザイン	デザイン	建築	デザイン	
プロジェクトの評価	入居者の多様性・交流	—	かなりの幅の人が入居し、多様性がおもしろかった。	—	
	地域や来訪者との交流	—	建物内外のネットワークが広がった。	北仲OPENを楽しむことができた。	
	連携・協働	—	入居者であるアートNPOの企画に参加する機会を得た。	—	
	建物	見学時から建物の入り口の雰囲気や間取り、造りの楽しさが気に入っていた。	見学会の時から、特に3・4階の南向きの部屋が気に入っていた。	建物の魅力によって、以前より関係者の集まりがよくなった。	—
	個々の活動	仕事の広がりが生まれた。	—	様々な実験が行える場であった。	—
	賃料	以前はSOHOだったが、独立した作業スペースを確保できた。	—	賃料が安価だったので、他と比較することなく入居を決めた。	賃料の安さに惹かれた。

No.	9	10	11	12	
年代	30	30	40	40	
入居前の活動拠点	横浜市内	東京都内	東京都内	東京都内	
ジャンル	建築	建築	建築	建築	
プロジェクトの評価	入居者の多様性・交流	—	—	アーティストと自由に交流でき、活動に刺激を受けた。	
	地域や来訪者との交流	入居者、来訪者、一般の人など多くの人と交流できた。	—	町に対していい活気を与えた。発信性があった。	—
	連携・協働	—	—	—	異なるジャンルのクリエイター・アーティストと一緒に仕事をするところがある。
	建物	海外の事務所勤務で体験していたような古い建物に惹かれた。	—	—	天井が高く空間的魅力があった。
	個々の活動	—	—	建築サロンを開催するなど活動の幅が広がった。	アーティストとの交流によって得た若い発想は仕事の上でヒントになった。
	賃料	—	暫定活用の場合、地域相場の半額以下でないとい入居者がいないのではないかと。	何よりも家賃の安さがよかった。	賃料が安いので広いスペースを確保することができた。

No.	13	14	15	16	
年代	—	—	20	30	
入居前の活動拠点	横浜市内東	京都内横	浜市内東	京都内	
ジャンル	建築	アートマネージャー	アートマネージャー	アートNPO	
プロジェクトの評価	入居者の多様性・交流	多分野のクリエイターと交流をもつことができ刺激になった。	—	—	
	地域や来訪者との交流	—	—	—	
	連携・協働	—	—	—	展示設計を北仲の建築家に依頼した。
	建物	都心でオフィスを探していたが、見学してみても建物が気に入った。	建物内の路地感覚がよかった。	天井が高い。ドアや鍵の部分などがかわいいと感じた。	—
	個々の活動	—	北仲OPENで事務局を経験した。	同世代の若手アーティストを対象にした企画展が実現した。	横浜での活動が増えた。
	賃料	—	—	賃料が安いことが部屋を借りて新たな実験をやってみようという気にさせた。	賃料が安価だったので横浜に拠点をもつことができた。

OPEN」のような交流の触媒となるイベントはあったものの、全入居者が十分に交流するには時間不足であったことが推察され、プロジェクト期間中には、具体的な連携や協働が創出されるところまでは至らなかった状況が考えられる。

IV. 結論

北仲プロジェクトは行政やNPO、民間企業の協働で創出され、コーディネータによって多様な創造活動者が誘致されていた。北仲プロジェクトは、建物の規模や構造、状態、立地等、創造の場に求められると考えられる多くの条件を有していたことから、創造活動者の評価を通して創造の場に求める優先的な条件を確認するには適切な事例であったと考える。

特に安価な賃料は、自宅以外に独立した創造の場を確保したい層とより広いスペースを確保したい層の両方から評価されていたことから、創造の場に求める優先的な条件であることが明らかになった。また創造活動者の多くにとって建物の歴史性や雰囲気という文化的条件の優先度は高く、特に営利活動を主とするデザインや建築分野の創造活動者とこだわりのある一部の層にとって優先度が高い条件であった。一定期間使用されず老朽化も目立つような北仲プロジェクトの歴史的建物のように、一般には評価が高くないと思われる環境条件に対して、多くの創造活動者が建物の造作や雰囲気などの魅力を発見していたことから、建物の歴史性や雰囲気などの条件は創造の場に求める創造活動者の固有の条件と考えられる。加えて、プロジェクト期間が1年半という不利な条件では、キャリア層や建築家やデザイナー等の主に営利活動を行う創造活動者の誘致は期待できないと思われるが、それにもかかわらず集積していたことから、安価な賃料と建物の歴史性・雰囲気という条件は、多様な創造活動者で構成される創造の場を創出するための環境条件と考えられる。その他に、多様な創造活動者の存在と交流が図られたこと、そして象徴的な建物であることからオープンアトリエなどにおいて注目度の高い発表の機会が創出されたことが評価されていたことから、歴史的建物は多様な創造活動者が集積する創造の場を生成するポテンシャルが高いことが明らかになった。

ただし、多様な創造活動者が集積するだけでは交流は促進されないことから、例えば、準備から開催に至る過程を通して交流が広がり関係性を深めるようなオープンアトリエ等の触媒を必要とすることが明らかになった。また、オープンアトリエ等の自発的な創造活動を実現するためには、主に非営利活動を行う若手のアーティスト等をはじめとする多様な創造活動者が存在すること、そして運営ボードのような自治的しくみによって自発的な活動が支援されることにより、交流の中から信頼関係が構築されて協働が生まれ、文化的価値や経済的価値を有する財やサービスが創出されるというプロセスが析出された。

[注]

- 1) 金沢や横浜を先頭に、近年、日本においても創造都市を政策目標に掲げ、創造産業の振興を目指す都市が、札幌、盛岡、仙台、名古屋、京都、大阪、神戸、広島、北九州、福岡など、政令指定都市や中核市において急増している（佐々木 [2008] p.77）。
- 2) 二つの構成要素から成るものとして定義され、中核となる「スーパー・クリエイティブ・コア」には科学者、技術者、大学教授、詩人、小説家、芸術家、エンタテイナー、俳優、デザイナー、建築家のほかに、現代社会の思潮をリードする人、たとえばノンフィクション作家、編集者、文化人、シンクタンク研究員、アナリスト、オピニオンリーダー、ソフトウェアプログラマー、映画製作者などが該当する。そして、そのまわりに「クリエイティブ・プロフェッショナル」が位置し、ハイテク、金融、法律、医療、企業経営など、様々な知識集約型産業で働く人々が該当する（Florida [2002] pp.68-72）。
- 3) スロスビーによると、文化産業は、「生産物に創造性を含んでいて、いくらかの知的所有権を具現化し、象徴的な意味を伝える産業」と定義し、文化産業と創造産業はある程度同義としている（Throsby[2001] pp.112-114）。
- 4) Throsby[2001] pp.112-114。

- 5) 後藤 [2005] p.204。
- 6) 例えば佐々木は、創造都市における創造の場について、ポローニャや金沢市をモデルに「創造都市とは市民の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備え、グローバルな環境問題や、あるいはローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行えるような『創造の場』に富んだ都市である(佐々木 [2001] pp.40-41)」と定義し、創造都市における重要な構成要素であることを提示している。
- 7) 佐々木 [2008] p.31。
- 8) 佐々木 [2001] p.25。
- 9) 創造の場について「企業家や知識人、社会運動家、芸術家、行政担当者など、開かれたコスモポリタンの文脈で活動が醸成され、そこでは、人と人との顔をつき合わせたやり取りによって、新しいアイデアや芸術作品、製品、サービス、施設などが生み出され、その結果として、経済的な成功をもたらす(Landry[2000] p.133)」と定義している。
- 10) 例えばスロスビーによって芸術家を職業で把握することが困難であることに注意を払った研究がなされているもの(Throsby[2001] pp.110-114)、創造活動を行う主体の活動状況に関する詳細な分析は管見の限り多くはない。
- 11) Florida[2002] pp.55-56。
- 12) 佐々木が提示する創造の場の空間条件の中には、想像力を刺激する創造的な雰囲気や環境が必要なことが挙げられ、しばしば伝統的な建築や産業遺産の再生活用が創造の場を作る力を秘めていることが指摘されている(佐々木 [2006] p.18)。
- 12) インタビューは以下の方に実施した(以下当時の所属による)。森ビル(株)都市開発事業本部 用地企画部 担当部長 真田年幸氏、北仲BRICK & 北仲WHITEインフォメーションデスク 佐藤朋子氏(2006.6.17、2007.3.22実施)、横浜市開港150周年・創造都市事業本部 創造都市推進課 担当課長 仲原正治氏(2006.6.16、2007.3.20実施)、NPO法人 BankART1929 副代表 池田修氏(2006.11.24実施)。
- 13) 2006年11月23～25日、2007年3月20～22日実施。
- 14) 横浜市・開港150周年・創造都市事業本部創造都市推進課
<http://www.city.yokohama.jp/me/keiei/kaikou/souzou/outline/>(2009年12月24日閲覧)。
- 15) 森ビル [2006] pp.4-5。
- 16) 横浜市開港150周年・創造都市事業本部創造都市推進課他 [2008] pp.17-18。
- 17) 横浜市・仲原氏による。
- 18) 森ビル・真田氏による。
- 19) BankART1929・池田氏による。
- 20) 森ビル [2006] p.18。
- 21) 2006年11月23～25日インタビュー調査実施。
- 22) 森ビル [2006] pp.6-7。
- 23) 北仲BRICKは2004年12月まで、北仲WHITEは、2003年夏まで使用されていた。
- 24) シゴカイボン編集委員会 [2009] p.182。
- 25) 森ビル [2005] p.15。
- 26) シゴカイボン編集委員会 [2009] p.117。
- 27) 森ビル [2005] p.16。
- 28) 森ビル・佐藤氏による。
- 29) 森ビル [2006] p.7。
- 30) 北仲OPEN!事務局長・丸山氏による。
- 31) 森ビル・真田氏他、複数の創造活動者によって同様な指摘がなされた。
- 32) 2006年11月23～25日、2007年3月20～22日実施したインタビュー調査より。

[参考文献]

- 上野信子 [2005]「大阪都心部の文化資本を活用した都市再生について—近代建築と「創造の場」に関する一考察」『都市経済政策』創刊号、大阪市立大学大学院創造都市研究科。
- 上野信子 [2006]「『創造の場』と都市再生に関する一考察—大阪市都心部のデザイン活動拠点の立地事例を通して」『産開研論集』第18号、大阪府立産業開発研究所。
- 上野信子 [2007]「都市における多様な建物の活用に関する一考察—歴史的建物の活用実験の事例を通して」『産開研論集』第19号、大阪府立産業開発研究所。
- 上野信子・瀬田史彦 [2008]「創造都市政策におけるアーティスト・クリエイターの誘致に関する研究—練習・制作場所と居住地選択の条件より—」『都市計画論文集』No.43-3、日本都市計画学会。
- 小川美由紀 [2009]「ポスト工業社会における都市空間再編と新しい都市アメニティー—横浜市での創造界隈を事例として—」首都大学東京都市環境科学研究科都市システム科学専攻編集『都市科学研究』No.3。
- 栢恵利香、吉武哲信、出口近士 [2003]「芸術家の居住地選択および居住環境評価に関する基礎調査」『都市計画論文集』No.38-3、都市計画学会。
- 後藤和子 [2005]『文化と都市の公共政策』有斐閣。
- 佐々木雅幸 [2001]『創造都市への挑戦』岩波書店。
- 佐々木雅幸 [2006]『CAFÉ—創造都市・大阪への序曲』法律文化社。
- 佐々木雅幸 [2008]「創造都市の連携と創造産業」『価値を創る都市へ』中牧弘允、佐々木雅幸、総合研究開発機構 NTT出版。
- シゴカイボン編集委員会 [2009]『シゴカイボン』。
- 住田和則・渡邊貴介・村田尚生 [1998]「現代日本における美術家の居住地分布の特性に関する研究」『都市計画論文集』、No.33 都市計画学会。
- 永井由香 [2008]「『創造界隈』の形成はヨコハマを変えたか」『調査季報』163号 横浜市都市経営局 調査・広域行政課。
- 野田邦弘 [2008]『創造都市 横浜の戦略』学芸出版社。
- 野中郁次郎、紺野登 [1999]『知識経営のすすめ—ナレッジマネジメントとその時代』ちくま新書。
- 森ビル [2006]『YOKOHAMA 北仲BRICK & 北仲WHITE EXPREIRNCE 創造界隈の生まれる瞬間』。
- 横浜市開港150周年・創造都市事業本部創造都市推進課・BankART1929 [2008]『クリエイティブシティ・ヨコハマのこれまでとこれから』。
- DCMS [1998] [2001] “*Creative Industries Mapping Document*”.
- D.Throsby [2001] “*Economics and Culture*”, Cambridge University Press (中谷武雄・後藤和子監訳, 2002 『文化経済学入門』日本経済新聞社)。
- H.Abbing [2002] “*Why Are Artists Poor? The Exceptional Economy of the Arts*”, Amsterdam University Press (山本和弘訳 [2007] 『金と芸術 なぜアーティストは貧乏なのか?』 grambooks)。
- J.Howkins [2001] “*The Creative Economy*”, Penguin Global.
- J.Jacobs [1961] “*The Death and Life of Great American Cities*”, Vintage Books (黒川紀章訳 [1977] 『アメリカ大都市の死と生』鹿島出版)。
- R.E. Caves [2000] “*Creative Industries*”, Harvard University Press.
- R.Florida [2002] “*The Rise of The Creative Class*”, Basic Books (井口典夫訳 [2008] 『クリエイティブ資本論』ダイヤモンド社)。